

2025年7月27日 聖霊降臨後第7主日 ルカ11: 1～13「求める者に聖霊を与えてくださる」

先週、大宮教会にて子どもたちと泊まり込みのキャンプを行いました。

今回は「テントを作ろう」というテーマで、集会室に突っ張り棒を2本立て、その間に物干し竿を渡し、窓のカーテンレールを使い、グリーンの10メートルほどのロープをジグザグに張り巡らせました。

その上に色とりどりの布をかけ、洗濯ばさみや安全ピンで留めました。ピンク、ブルー、グレー、茶色など、多彩なパッチワークができあがりました。床にはリノリウムの上に銀色のクッションシートを敷きました。

子どもたちは大はしゃぎで、そこで語り合い、夜は『プリンス・オブ・エジプト』（モーセの物語）を観ながら眠りにつきました。一番嬉しそうな表情を浮かべていたのは、お手伝いに来てくださった教会員の方々だったかもしれません。

泊まりの子どもキャンプは、実に6年ぶりの開催だったそうです。新型コロナウイルスや。無牧の時期が続き、長らく開催できませんでした。

「やっと自分たちで実現できた」と、皆さんが大変喜んでおられました。

子どもたちが教会にいるということは、なんと素晴らしいことでしょう。

教会員の方々の上に、豊かな喜びが溢れます。まるでパンを求める旅人が訪れたとき、どうにかしてパンを集めるように、子どもたちが泊まってくれるからこそ、心を尽くして食事を整えるのです。

教会員の方々の働きは実に大変でした。

日曜日の朝から集まり、たくさんのカレーを作り、礼拝に来られた方々に食べていただく。

夜は、子どもたちが温泉に出かけている間にバーベキューの準備。たくさん野菜を切り、お肉を用意し、焼きそばも作る。

翌朝は、子どもたちを6時に起こして、大宮公園でのラジオ体操に引率。

帰ると、既に朝食が整い、サンドイッチやサラダ、ホットドッグを用意する……。

本当にすごいチームワークでした。

子どもたちには言いませんでしたが、この「テント作り」には隠れた願いがありました。

テントは一人では作れません。小さなテントでも二人いればずっと楽になる。

大きなテントなら、多くの人が協力し合わなければ立ちません。

みんなで力を合わせて作る楽しさを体験してほしいのです。

子どもたちも、それをよく理解してくれたようでした。

最後にテントを片付けるとき、
「作った時と逆の順番で外していこう」と呼びかけると、子どもたちは驚くほど手際よく動きました。小学校1年生も二人いましたが、自分たちで作ったからこそ、構造を理解し、無駄のない動きをしていました。
それでも、「せっかく作ったのに、壊しちゃうの?」「明日も泊まりたい」という声もありました。

「お父さんやお母さんが迎えに来るから今日で終わりだよ」と答えると、
「じゃあ、今度はいつ? 来週?」と尋ねられました。
「これからは暑いから、次は1年後かな」と話すと、
「じゃあ、冬にやりますか? 寒いかもしれないけど」と、教会員の方々が相談を始めました。

今回はリノリウムの床に銀色のクッションシートを敷いて皆で寝ました。
みんなで一つ屋根の下にいることの喜びは格別です。
ただ一緒にいるだけで、人は嬉しい。子どもだけでなく、大人も同じです。
「なぜ、こんなに皆が喜んでいるのだろう」と思ったとき、私は気づきました。
「誰かのために働くことこそ、人にとって大きな喜びである」と。

小学1年生のデリン君は、礼拝後の片付けでも率先して掃除をし、食器を運んでくれました。
「すごいね、頑張ってるね」と声をかけると、
「いつもこうやって働いてるんだよ」と言いました。
翌日お母さんに尋ねると、
「家でもいつも手伝ってくれるんです」と教えていただきました。
誰かの幸せのために働く。誰かを不幸にするためではなく、喜びをもたらすために働く。これほど素晴らしいことはありません。

今日の第1日課でアブラハムは神さまに「無実の人々をどうかお赦してください」と願います。
その姿を見て、私はあるドキュメンタリーを思い出しました。
NHK『クローズアップ現代』で、39年間冤罪を背負い続け、今年7月に無罪が確定した方の物語が放送されました。

1986年3月、中学生が亡くなった事件で、翌年、当時21歳だった前川さんが逮捕されました。

一度は無罪となりましたが、検察が控訴し、1995年に逆転有罪となります。

それから39年、前川さんは無実を訴え続け、ようやく無罪が確定しました。

お母様はすでに亡くなられましたが、お父様は今もご健在で、支え続けてこられたそうです。

この事件では、警察・検察が「自分たちの判断は正しい」という姿勢を崩さず、有利な証言は隠され、再審請求が何度も退けられてきました。

しかし、決め手となった証言をした友人が、

「実は嘘でした。警察に言われて証言しただけで、本当は血だらけの彼を見ていません」

と告白しました。

前川さんが静かに、礼拝堂で主の祈りを祈っている場面が映りました。

そして驚くべきことに、前川さんはみことばどおり偽りの証言をした友人を赦したのです。

確かに彼は「私はあの人を赦します」と言いました。

私は改めて、「主の祈りの力は凄まじい」と感じました。

今日の福音書は、イエスさまが弟子たちに「主の祈り」を教えてくださいの箇所です。

ここで重要なのは「誰のための祈りか」という点です。

主の祈りは常に『私たち』のために祈る言葉です。

「私に必要な糧を与えてください」ではなく、

「私たちに必要な糧を、日ごとに与えてください」と祈るのです。

しかしいま「自分だけ」「自国だけ」といった排他的な思想が目立つこともあります。

その姿は、まるで壁を高く立てて多くの人を排除するかのようです。

主の祈りは、その壁を壊し、共に分かち合う祈りです。

イエスさまは最後にこう言われます。

「あなたがたは悪い者でありながら、自分の子どもには良いものを与えることを知っている。」

これは、神の愛が、親の愛を超えていることを示す御言葉です。

天の国とは、私たちが「行く」場所ではなく、
天の国が私たちのところに「来る」ものだと、イエスさまは語られます。
そのために、聖霊が私たちの心に降ってくださる必要があります。
そして私たちは、すべての人を受け入れる心を開き続けるのです。
テントは、その象徴です。
テントには固い壁がなく、人を閉め出すことはありません。
人々が増えれば、上に布を広げて受け入れることができます。
私たちの心も同じです。
隔ての壁を立てるのではなく、恵みの覆いを大きく広げ、多くの人に居場所を提供する。
神から与えられる恵みも試練も共に分かち合うために、
みんなで教会というテントを立てるのです。

テントに集う人々の中に、イエスさまの愛が確かに届くことを、私は心から願っています。